

育児経験を有する女性看護師のキャリア発達における レジリエンスの様相

－中堅の時期の困難に焦点をあてて－

小手川 良 江* 本 田 多美枝*

Key Aspects of Resilience in the Career Development of Female Nurses with Childcare Experience

－Focusing on Mid-career Difficulties－

Yoshie Kotegawa* Tamie Honda*

要旨：

〔目的〕 育児経験を有する女性看護師が中堅の時期に経験した困難を乗り越えるプロセスから、キャリア発達におけるレジリエンスの様相を明らかにする。

〔方法〕 経験年数15年目以上20年目以下の育児経験を有する女性看護師6名を対象に半構造化面接を行った。複線径路等至性モデリング（TEM）にて分析し、困難な経験と乗り越えた結果、影響要因をTEM図に表した。

〔結果〕 育児経験を有する女性看護師のキャリア発達におけるレジリエンスの様相は、『ライフイベントによる困難を乗り越える局面』と『中堅看護師としての役割負担による困難を乗り越える局面』があり、自身の力と周囲からの支援を受けて困難を乗り越え、成長につなげるという一連のプロセスであった。

〔考察〕 本人の力を発揮するためには、節目となるような時期を見極めたタイムリーな支援、困難を乗り越えた経験やその結果についての意味づけを行うことの必要性が示唆された。

キーワード：レジリエンス、女性看護師、キャリア発達、複線径路等至性モデリング（TEM）、育児経験

緒 言

日本では急激な高齢化が進んでおり、看護師確保が重要な課題となっている。そのため、看護師の質的・量的な確保にむけて、生涯にわたる職業の継続と自己研鑽による資質向上やキャリア発達への支援の重要性が示されている（厚生労働省、2023a）。

しかし、厚生労働省の調査（2023b）では、就業している看護師の年齢構成割合は30歳～39歳が低くなっており、中堅の時期に離職していると考えられた。さらに、潜在看護師となった人には離職を後悔している人の存在も示されており（植田他、2022）、離職が本人が望む看護師としてのキャリア発達の中断につながっている状況があった。中堅看護師の離職

*日本赤十字九州国際看護大学

（受付日：2024年6月7日，受理日：2025年1月17日）

連絡先 小手川良江／日本赤十字九州国際看護大学 〒811-4157 福岡県宗像市アスティ1丁目1番地
Phone：0940-35-7001／E-mail：y-kotegawa@jrckicn.ac.jp

理由は、多忙な業務やライフイベントなど多岐にわたる（齊藤，2018）が、25歳以上になるとライフイベントが最も多く（日本看護協会，2022）、中堅の時期の離職に大きな影響を与えている。質を確保した医療提供のためには、経験や知識を備えた中堅看護師の果たす役割は大きく、中堅の時期の離職を防ぐことが必要である。特に、ライフイベントは中堅の時期の離職に大きな影響を与えており、ライフイベントによるキャリア発達中断を防ぐことが喫緊の課題であると考えた。

キャリア発達については、個人の人生において、役割、場面や出来事の統合による生涯を通した自己発達であると示されており（Gysbers & Moore, 1975, p.648）、看護師自身の主体的な取り組みが重要である。しかし、中堅看護師のキャリア発達については、キャリア形成に対する意欲減退などの課題が指摘されている（柿田他，2023）が、中堅看護師自身がどのようにキャリア発達しているのかについては示されていない。主体的なキャリア発達のためには、中堅看護師が自身の力を発揮することが重要である。中堅の時期の離職を防ぎ、本人が望むキャリア発達をするためには、離職につながるような困難な経験を看護師自身がどのように乗り越え、どのようにキャリア発達したのかを明らかにする必要があると考えた。そこで、本研究では、危機を乗り越える概念であるレジリエンスに着目した。

レジリエンスは、子どもが貧困などの逆境にありながらも、それを乗り越え発達するという回復のプロセスやプロセスに影響する要因から示された概念であり、困難で脅威的な状況にもかかわらず、うまく適応する過程・能力・結果であることが指摘されている（Masten et al., 1990, p.426）。レジリエンスは、困難を乗り越え、回復のプロセスの中で発揮する力やプロセスに影響する要因、結果を示す概念であるが、看護師を対象とした先行研究の多くは、レジリエンスを尺度で測定し、一時点におけるレジリエンスの強さや影響要因を示すことを目的としており（香川・山本，2022；Mealer et al., 2017）、困難を乗り越える過程やその結果は明らかにされていない。そのため、看護師が離職を考えるような困難な経験を乗り越え、どのようにキャリア発達したのかを明らかにするためには、キャリア発達という側面

から、離職を考えるような困難な経験と困難を乗り越えるために必要であった力や影響した要因、困難を乗り越えた結果を明らかにし、その全体の有り様をレジリエンスの様相として捉える必要があると考えた。

一方で、困難を経験している渦中では、困難を乗り越える過程や乗り越えるために必要な力、影響要因、結果を本人が認識することは難しい。そのため、困難を乗り越え仕事を継続している看護師を対象に、看護師のキャリア発達という側面からレジリエンスの様相を捉える必要があると考えた。さらに、中堅看護師の離職にはライフイベントが影響することから、本研究では育児経験を有する女性看護師を対象とした。

以上より、本研究では、看護師として仕事を継続している育児経験を有する女性看護師を対象とし、キャリア発達の側面から、中堅の時期に離職を考えるような困難な経験と困難を乗り越えるために必要であった力や影響した要因、困難を乗り越えた結果を明らかにし、その全体の有り様をキャリア発達におけるレジリエンスの様相として可視化することを目的とした。レジリエンスの様相を可視化することにより、育児経験を有する女性看護師が、困難を経験しながらも困難を乗り越えキャリア発達していく姿を描くことができる、さらには本人が望むキャリア発達のために必要な看護師自身の力についての示唆を得ることができると考えた。

I. 研究方法

1. 用語の定義

中堅の時期：中堅看護師については、経験年数3年目から25年目と幅が見られるが（新井他，2016）、10年目までの離職が多いことを考慮し10年目前後の期間を含む、経験年数5年目以上15年目未満の時期を中堅の時期とする。

キャリア発達におけるレジリエンス：レジリエンスの概念（Masten et al., 1990）を参考に、中堅の時期に離職を考えるような困難な経験と困難を乗り越えるために必要であった力や影響した要因、困難を乗り越えた結果とした。その全体の有り様をキャリア発達におけるレジリエンスの様相とした。

2. 研究デザイン

複線径路等至性モデリング (Trajectory Equifinality Modeling: 以下、TEM) (安田・サトウ, 2022) の分析手法を用いた研究デザインとした。TEMは、人間の発達や人生径路の多様性・複線性の時間的変容を捉える分析・思考の枠組みモデルであり (荒川他, 2012)、レジリエンスの様相を可視化できると考えた。

3. 研究参加者

日本では、看護師の6割は病院に勤務しており (厚生労働省, 2023b)、病院の半数以上が中規模病院 (病床規模100~499床) である (厚生労働省, 2023c)。そのため、就業している看護師の多くが中規模病院で勤務していると考え、中規模病院で働く管理職・専門看護師・認定看護師以外の育児経験を有する女性看護師であり、中堅の時期に育児と仕事の両立を経験し、その結果までを語ることができる経験年数15年目以上20年目以下の看護師を対象とした。

研究に対して了承が得られた施設の看護部長から上記に該当する看護師の紹介を受け、研究参加への同意を得られた者を研究参加者とした。

4. データ収集方法

2019年7月~2021年3月に、インタビューガイドを用いて半構造化面接を1回60分程度で1人につき2回実施した。

1回目は、中堅の時期に「離職を考えるような困難な経験」と「困難を乗り越えるために必要であった力や影響した要因」、「困難を乗り越えた結果」をふまえてインタビューした。2回目のインタビューでは、研究参加者個別の逐語録とTEM図を提示し、具体的な内容を確認した。インタビュー内容は許可を得て録音した。

5. 分析方法

TEMの概念をもとに分析し、中堅看護師のキャリア発達におけるレジリエンスの様相を可視化した。分析例については図1に示し、分析の詳細を以下に示す。

1) 研究参加者ごとのTEM図の作成

「離職を考えるような困難な経験」、「困難を乗り越える過程」、「困難を乗り越えるために必要な力」、「困難を乗り越えた結果」、「困難を乗り越えることに影響した要因」について意味内容ごとに抽出し、簡潔に表したものをコードとした。コードを類似性により集めてサブカテゴリーを作成し、時系列に並べた。

時系列に並べたサブカテゴリーをTEMの概念 (安田・サトウ, 2017) を基に分析した。等至点 (Equifinality Point: EFP) は研究テーマをもとに設定され、EFPに至る複数の径路を前提とした発達のゴールである。本研究では、育児経験を有する女性看護師が中堅の時期に離職を考えるような困難な

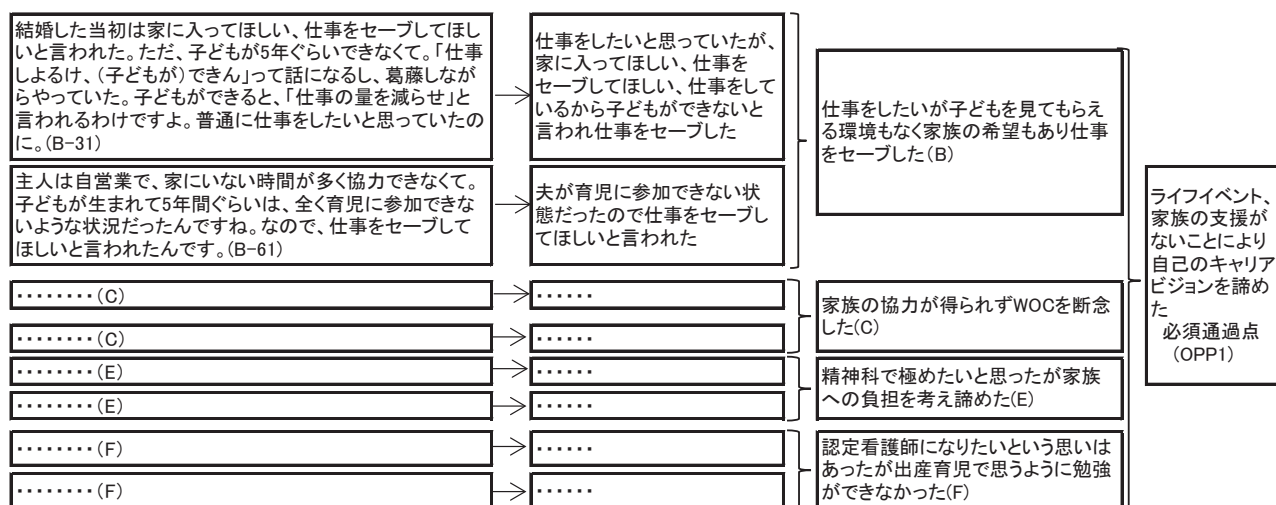


図1 分析過程の例

経験を乗り越えた結果をEFPとした。

次に、EFPに至る過程において、分岐点（Bifurcation Point：BFP）となる箇所を検討した。BFPは、径路がいくつかに分岐するポイントであり、あとで振り返ることにより当人にとって意味を帯びるような転機点である。本研究では、中堅の時期に困難を乗り越える過程においていくつかの径路に悩み転機になったポイントを研究参加者に確認しBFPとした。

さらに、EFPに至る過程において、影響する要因を社会的助勢（Social Guidance：SG）、社会的方向づけ（Social Direction：SD）として検討した。SGはEFPに向かう有り様を促し助ける力であり、本研究では、困難を乗り越える際に乗り越えることを促進する影響要因や乗り越えるために必要な力とした。SDは、EFPに向かう個人の行動や選択に制約的、阻害的な影響を及ぼす力であり、本研究では、困難を乗り越える過程において制約的、阻害的な影響を与える要因とした。SGとSDについては、職場に関連するものを職場レベル、個人に関連するものを個人レベルとした。

2) 統合したTEM図の作成

研究参加者全員のサブカテゴリーを類似する内容にまとめてカテゴリーを再生成し、統合したTEM図を作成した。統合したTEM図において、必須通過点（Obligatory Passage Point：OPP）を検討した。OPPは、ある状況や行動・選択に至るうえで、多くの人が通るポイントのことを指しており、ある程度自由度があるはずの人の行動や選択が、文化的・社会的に制約や制限がかかってひとつの有り様に収束している様相が描かれている。本研究では、6名の研究参加者のうち4名以上から抽出されたカテゴリーをOPPとした。さらに、研究参加者にとって節目となるような時期を時期区分として検討した。

6. 信用性・妥当性の確保

TEM図にてレジリエンスを示すにあたり、TEMを用いた研究の専門家にスーパーバイズを受けた。分析の過程においては、質的研究指導実績のある研究者と検討を重ね、データの整合性や内容の妥当性を確認し、合意に至るまで繰り返し検討した。また、研究参加者に作成した研究参加者個別の逐語録

とTEM図を提示し、認識のずれがないことを確認した。

7. 倫理的配慮

紹介による参加への強制力を除くために、研究者自身が、研究参加者に研究の目的と方法、研究参加の任意性、個人情報の保護などについて文書と口頭にて説明を行い、文書による同意を得た。

なお、日本赤十字九州国際看護大学研究倫理審査委員会（承認番号：18-025-②）および日本赤十字九州国際看護大学大学院看護学研究科共同看護学専攻（博士課程）研究倫理委員会の承認（承認番号：18-025-②）を得て実施した。

Ⅱ. 結 果

1. 研究参加者の概要

インタビューは7名に実施し、インタビューを2回実施できた6名を研究参加者とした。年齢は30歳代～40歳代であり、経験年数は15～19年目であった（表1）。

2. 育児経験を有する女性看護師のキャリア発達におけるレジリエンスの様相

統合したTEM図にて育児経験を有する女性看護師のキャリア発達におけるレジリエンスの様相を表した。また、研究参加者にとって節目となる時期区分は、第Ⅰ期から第Ⅴ期の5つが見出された。さらに、時期区分において困難を経験し乗り越えるというプロセスを検討すると、第Ⅰ期から第Ⅱ期の『ライフイベントによる困難を乗り越える局面』、第Ⅲ期から第Ⅴ期の『中堅看護師としての役割負担による困難を乗り越える局面』が抽出された。以下、これら2つの局面について述べていく。[] は分岐点（BFP）、{ } は必須通過点（OPP）、『 』は等至点（EFP）、[] は社会的方向づけ（SD）、（ ）は社会的助勢（SG）、「イタリック体」はインタビューでの語りを示す。また、見出した時期区分は【 】、局面は『 』に示す。

1) 『ライフイベントによる困難を乗り越える局面』

『ライフイベントによる困難を乗り越える局面』は、時期区分第Ⅰ期から第Ⅱ期であり、育児経験を

表1 研究参加者の概要

項目	B	C	D	E	F	G
年代	30歳代	40歳代	40歳代	40歳代	40歳代	30歳代
経験年数	16年目	19年目	16年目	19年目	19年目	15年目
看護教育最終学歴	専門学校	専門学校	専門学校	専門学校	専門学校	大学
婚姻状況	既婚	既婚	既婚	既婚	既婚	既婚
子どもの人数	2	2	2	3	2	1
病院の異動	2か所目	異動なし	異動なし	3か所目	2か所目	3か所目
現在勤務している病院の特徴	病床数約200床 地域医療支援病院	病床数約150床 特定の疾患の専門病院	病床数約200床 認知症などの老年医療	病床数約200床 認知症などの老年医療	病床数約150床 在宅療養支援病院	病床数約150床 在宅療養支援病院
現在勤務している病院での経験年数	11年目	19年目	16年目	8年目	17年目	1年目
現在勤務している病院での病棟異動	あり	あり	あり	あり	あり	あり

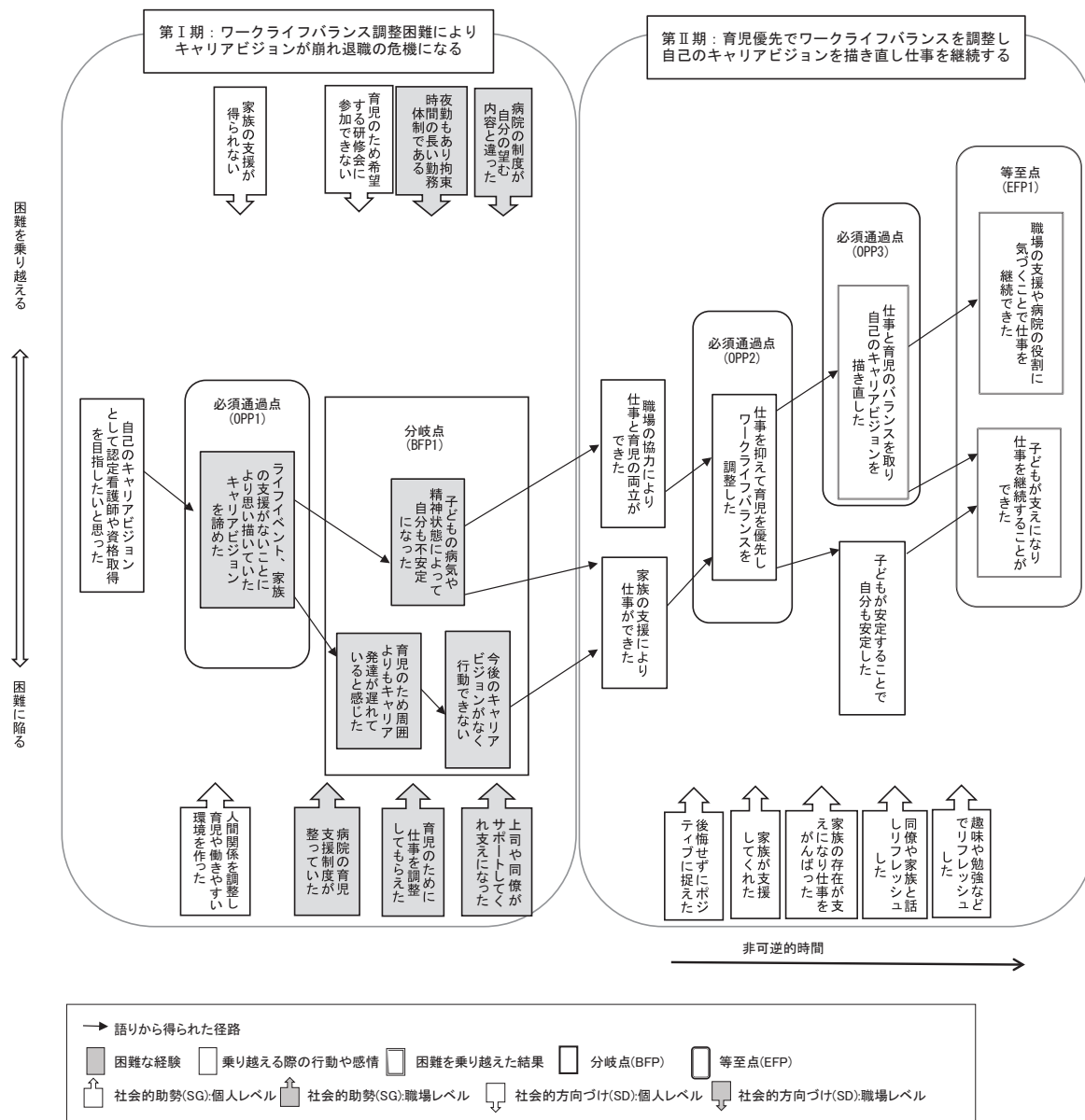


図2 ライフイベントによる困難を乗り越える局面

有する女性看護師にとって、ライフイベントによる困難から離職を考えながらも、仕事の継続につながったプロセスであった(図2)。

第Ⅰ期【ワークライフバランス調整困難によりキャリアビジョンが崩れ退職の危機になる】は、必須通過点(OPP1){ライフイベント、家族の支援がないことにより思い描いていたキャリアビジョンを諦めた}に表現されるように、多くの研究参加者が結婚や育児などのライフイベントによってキャリアビジョンを諦めるような経験であった。

研究参加者のキャリアビジョンとしては、資格取得だけでなく、急性期の看護を深めたいなどの思いもあった。しかし、ライフイベントにより思い描いていたキャリアビジョンを諦めて病院を移動する経験や、教育機関に通うことを断念することにより、分岐点(BFP1)となる「育児のため周囲よりもキャリア発達が遅れていると感じた」などの困難を経験していた。この分岐点は時期の区切りになっており、研究参加者にとって節目となる困難であった。この困難を乗り越えた要因として、研究参加者は、《人間関係を調整し育児や働きやすい環境を作った》という個人レベルの社会的助勢(SG)の活用を挙げていた。研究参加者は、「この人と合わないと思うけど、自分から歩み寄って、仕事がやりやすいようにした(D)」と述べているように、人間関係を自ら調整し働きやすい環境を作っていた。一方で、節目になるような困難は個人の力だけでは解決できないため、《育児のために仕事を調整してもらえた》、《上司や同僚がサポートしてくれ支えになった》などの職場レベルの社会的助勢(SG)を受けたことを認識しており、周囲からの支援を受けて危機的な状況を乗り越えていた。

第Ⅱ期【育児優先でワークライフバランスを調整し自己のキャリアビジョンを描き直し仕事を継続する】は、{仕事を抑えて育児を優先しワークライフバランスを調整した}という必須通過点(OPP2)、{仕事と育児のバランスを取り自己のキャリアビジョンを描き直した}という必須通過点(OPP3)からなり、育児経験を有する女性看護師がライフイベントに伴う困難を乗り越える結果を示していた。

研究参加者の「今の期間はこれをする。子どもが育ったら違うことをすればいい。できることをすれ

ばいいと思った(B)」という語りに代表されるように、研究参加者の多くが自己のキャリアビジョンを描き直す経験をしていた。研究参加者は、困難を乗り越えた要因として、《後悔せずにポジティブに捉えた》、《家族が支援してくれた》、《家族の存在が支えになり仕事をがんばった》などの個人レベルの社会的助勢(SG)を活用していた。また、研究参加者の「(育児のために)前の職場を辞めて、この病院に来るという選択も、自分が決めたから悩んでも仕方がない(B)」、「子どもからお母さんが、看護師として働いていることが誇りだと言われた。つらいこともあるけど、頑張ろう、続けようと思った(F)」という語りに代表されるように、育児によってキャリアビジョンを諦める経験もしているが、子どもを含めた家族の存在が支えになることによって困難を乗り越え、今の状況に応じたキャリアビジョンに描き直していた。研究参加者は、自己のキャリアビジョンを描き直すことにより仕事を続け、等至点(EFP1)『職場の支援や病院の役割に気づくことで仕事を継続できた』、『子どもが支えになり仕事を継続することができた』に至っていた。

2)『中堅看護師としての役割負担による困難を乗り越える局面』

『中堅看護師としての役割負担による困難を乗り越える局面』は、時期区分第Ⅲ期から第Ⅴ期である。育児は続いているが子どもの成長に伴い、中堅看護師としての役割負担が課され、さらなる困難を経験するが、困難を乗り越え自己の成長を認めるというプロセスを示していた(図3)。

第Ⅲ期【子どもの成長に伴い異動や中堅看護師としての役割が増え困難を何度も経験する】は、「異動に伴う環境の変化により自信喪失やストレスを感じた」という分岐点(BFP2)、[仕事による負荷がストレスになっていた]、[研究や委員会の役割がストレスや負担になった]、[仕事の負担が大きく育児や母親役割ができずに葛藤した]という分岐点(BFP3)からなり、育児経験を有する女性看護師が育児に加え中堅看護師としての役割負担に伴う困難を経験する時期であった。この分岐点(BFP3)は、{子どもが成長し研究や委員会の役割を担うようになった}という必須通過点(OPP4)によって経験する困難であり、時期区分の区切りにもなっていた。

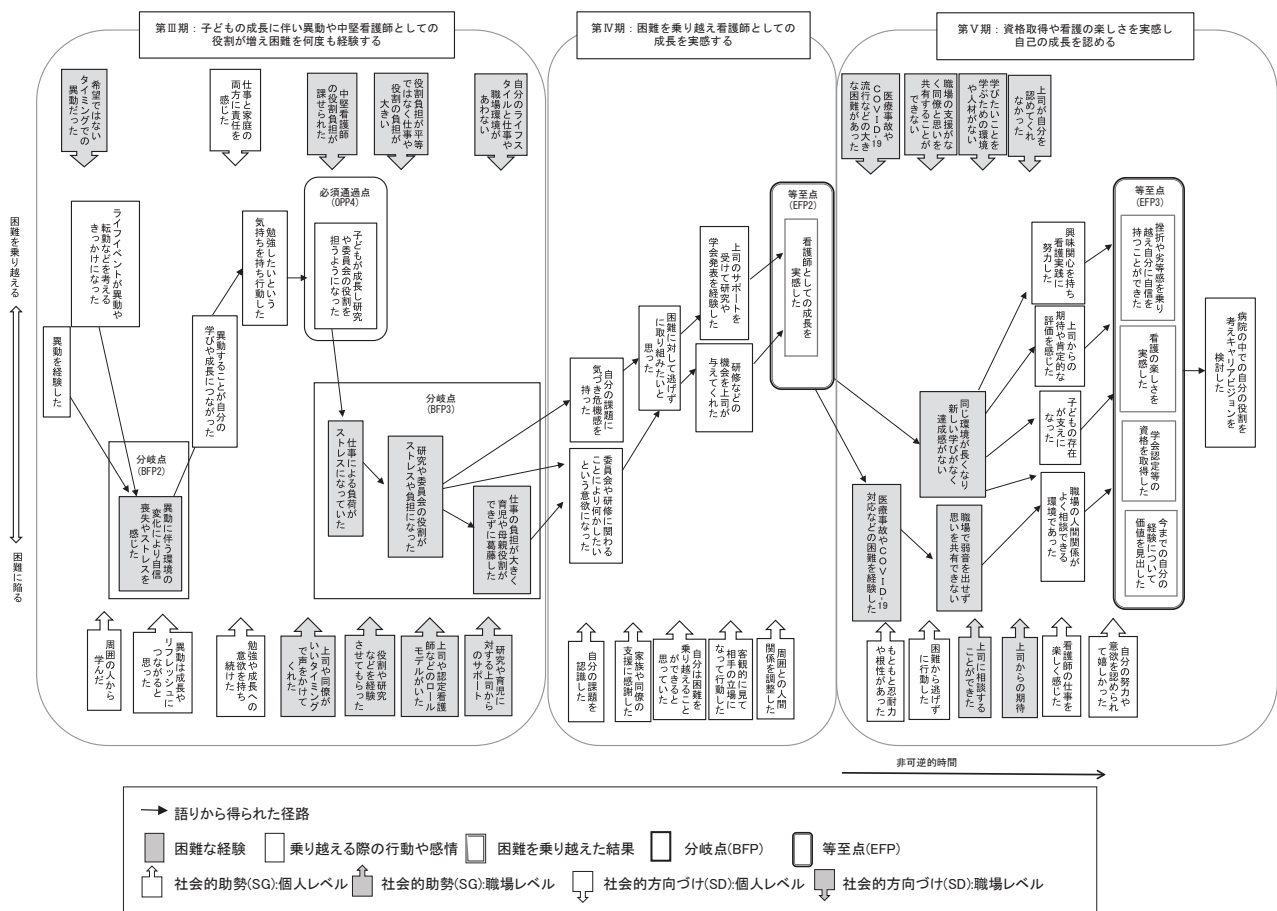


図3 中堅看護師としての役割負担による困難を乗り越える局面

研究参加者は、困難を乗り越えた要因として、「勉強や成長への意欲を持ち続けた」などの個人レベルの社会的助勢（SG）の活用を挙げていた。研究参加者は、「管理研修に行きなさいと言われてつらくなった。でも、興味を自分の中に見つけて受け入れて学んだほうがいいと思った（F）」などと述べており、困難に対して前向きに捉え取り組んでいた。

しかし、中堅看護師としての役割負担による困難は、「希望ではないタイミングでの異動だった」、〔中堅看護師の役割負担が課せられた〕などの職場レベルの社会的方向づけ（SD）が影響しており、個人では対処できない状況であった。そのため、研究参加者は、「上司や同僚がいいタイミングで声をかけてくれた」、「役割や研究などを経験させてもらった」、「研究や育児に対する上司からのサポート」などの職場レベルの社会的助勢（SG）を、困難を乗り越えた要因として認識していた。支援に対する研

究参加者の語りとして、「私の今までを知っているのかなと思うぐらいのいいタイミングで声をかけてくれる（F）」、「役割は負担にはなるけれど、喜びが生まれる部分でもある。頑張ると結果がついてくる（B）」などがあり、周囲からのタイムリーな支援が困難を乗り越えた要因であると感じていた。また、役割負担は困難の要因にもなっているが、一方で役割を任されることによる成長も実感していた。

第四期【困難を乗り越え看護師としての成長を実感する】は、育児経験を有する女性看護師が困難を乗り越えた結果、『看護師としての成長を実感した』という等至点（EFP2）に至った時期であった。

研究参加者は、困難を乗り越えた要因として、「（家族や同僚の支援に感謝した）」、「客観的に見て相手の立場になって行動した」、「周囲との人間関係を調整した」などの個人レベルの社会的助勢（SG）の活用を挙げていた。研究参加者は、「子どもの病気で休むこともあるが、相手がどう思っているかを、

自分に置き換えて考えて調整している。家族についても、この日は自分が子どもを見る、この日はお願いするとかやっていた (D)」と述べていた。このように、客観的に状況を捉えて人間関係を調整し必要な支援を受けていた。研究参加者は困難を乗り越え、「患者さんが知りたいことについて、それに答えられるということが多くなってくると純粋に楽しい (C)」と述べているように、『看護師としての成長を実感した』という等至点 (EFP2) に至っていた。

第Ⅴ期【資格取得や看護の楽しさを実感し自己の成長を認める】は、研究参加者が中堅の時期の困難を乗り越えた結果として、『挫折や劣等感を乗り越え自分に自信を持つことができた』、『看護の楽しさを実感した』、『学会認定等の資格を取得した』、『今までの自分の経験について価値を見出した』という等至点 (EFP3) に至り、自己の成長を認めた時期であった。研究参加者は、等至点 (EFP) として「WOCはなれないけど、自分のスキルアップをしないと意味がないと思って臨床スキンケア看護師になった。(中略) 今まで褥瘡を学んでいたことが役立つと思った (C)」と述べているように、研究参加者が中堅の時期の困難を乗り越えた経験を振り返ることで語られた内容である。研究参加者は、困難に陥りながらも、『看護師の仕事を楽しく感じた』、『自分の努力や意欲を認められて嬉しかった』などの個人レベルの社会的助勢 (SG) と、『上司からの期待』などの職場レベルの社会的助勢 (SG) を活用し困難を乗り越えていた。このように、研究参加者は上司からの支援や承認を受けながら、自身の力を発揮して等至点 (EFP) に至っていた。

Ⅲ. 考 察

1. 育児経験を有する女性看護師のキャリア発達におけるレジリエンスの様相の特徴

育児経験を有する女性看護師の中堅の時期に離職を考えるような困難な経験に焦点をあてると、キャリア発達におけるレジリエンスの様相は、困難を経験しながらも自身の力と周囲からの支援を受けて困難を乗り越え自己の成長につなげるという一連のプロセスであることが示された。また、そのプロセスには『ライフイベントによる困難を乗り越える局面』と『中堅看護師としての役割負担による困難を

乗り越える局面』があることが明らかになった。これら二つの局面に着目すると、研究参加者は、ライフイベントによってキャリアビジョンが崩れる経験をしながらも、今の状況に応じたキャリアビジョンに描き直し困難を乗り越えていた。しかし、子どもの成長に伴い中堅看護師としての役割が課され、育児と中堅看護師の役割が重なり、再び困難を経験していることが示された。

中堅看護師の離職理由は多忙な業務と重い責任、ライフイベントなどが指摘されている (齊藤, 2018) が、離職理由は独立したものではなく、重なることにより離職を考えるような困難になっていた。このような困難は、TEM図で分岐点 (BFP) として示されており、退職も含めた経路に悩みながらも仕事の継続を選択したポイントでもあった。研究参加者にとっては、仕事を継続したことが困難を乗り越えた結果である等至点 (EFP) につながっており、キャリア発達において重要な転機であった。この分岐点 (BFP) に研究参加者自身の力や周囲からの支援を活用し仕事を継続したことが、困難を経験しながらも困難を乗り越え自己の成長につなげるために重要であったことが示唆された。

次に、女性看護師の主体的なキャリア発達に必要な力を捉えるために、困難を乗り越える際に乗り越えることを促進する影響要因や乗り越えるために必要な力である個人レベルの社会的助勢 (SG) に着目した。その結果、育児経験を有する女性看護師のキャリア発達におけるレジリエンスの様相には、周囲との人間関係を調整する力や周囲からの支援を認識する力を発揮して主体的に困難を乗り越えていること、子どもや家族の存在が力になるという特徴が見出された。

周囲との人間関係の調整については、『人間関係を調整し育児や働きやすい環境を作った』という個人レベルの社会的助勢 (SG) に示されるように、第Ⅰ期から継続的に人間関係を調整する力を発揮して育児と仕事を両立していた。中堅看護師が仕事を継続する理由として、職場の良好な人間関係が挙げられており (中野・岩佐, 2019)、仕事の継続には、人間関係が重要である。本研究では、研究参加者自身が、普段から支援を受けることができるような人間関係を構築していたことで、困難を乗り越えたこ

とが示され、人間関係を調整する力を発揮することが重要であると考えられた。

また、研究参加者は、自分が受けた周囲からの支援を認識しているという特徴があった。退職を考える状況になっても仕事を継続するためには、周囲からの支援に気づくことの重要性が指摘されている(小手川・本田, 2019)。本研究においても、研究参加者が周囲からの支援を認識する力を発揮したことにより、自分で行う部分と支援を依頼する部分を調整し、育児と仕事の両立を可能にしており、自分が受けている支援を認識する力を発揮することが困難を乗り越えるために必要だと示唆された。

さらに、育児経験を有する女性看護師にとって育児は、「仕事の負担が大きく育児や母親役割ができずに葛藤した」などの分岐点(BFP)となる困難につながっていた。その一方で、「家族の存在が支えになり仕事をがんばった」という個人レベルの社会的助勢(SG)が困難を乗り越えることにもつながっていた。中堅看護師を対象とした研究では、自尊感情と自己効力感がレジリエンスに影響することが示唆されている(根木・片山, 2018)。本研究においても、母親が仕事をする姿に対して子どもからの尊敬の気持ちが困難を乗り越える大きな原動力になっており、子どもを含めた家族の存在が困難を乗り越える力になることが示唆された。

2. 育児経験を有する女性看護師の主体的なキャリア発達を促進するための示唆

TEM図に示された「ライフイベント、家族の支援がないことにより思い描いていたキャリアビジョンを諦めた」必須通過点(OPP1)と「子どもが成長し研究や委員会の役割を担うようになった」必須通過点(OPP4)は、育児経験を有する女性看護師が望むキャリアビジョンに向かってキャリア発達することの難しさを表していた。研究参加者のキャリアビジョンは資格取得だけでなく、興味や関心のある分野で学び続けるなどの内容であったが、ライフイベントの影響は大きかった。必須通過点(OPP)は、文化的・社会的に制約や制限がかかってひとつの有り様に収束している様相が描かれる(安田・サトウ, 2017, p.13)。本研究の参加者については、年齢や経験年数、看護教育最終学歴などの背景は異

なるが、ライフイベントの影響を述べており、女性にライフイベントによる制限がかかっていると考えられた。このようなライフイベントによる制限は、「仕事の負担が大きく育児や母親役割ができずに葛藤した」などの分岐点(BFP)となり、次の時期区分に移行する節目になっていた。節目となるような困難は、いくつもの役割負担が重複した状況であるため、女性看護師自身の力だけで困難を乗り越えることは難しく組織からの支援も必要となる。そのため、育児経験を有する女性看護師は、一人で抱え込まずに自身の状況や支援の必要性を伝えることも必要である。さらに、節目となるような困難は育児経験を有する多くの女性看護師が経験する困難であるため、管理者も節目の時期に重点を置き、必要な支援を見極めタイムリーに支援を行うことが重要であると示唆された。

また、研究参加者は、困難を乗り越えたからこそ、成長の実感や過去の経験についての価値を見出し、等至点(EFP3)に至っていた。魚住・水野(2020)は、葛藤を意味づけする過程は、出来事の価値などを評価し、出来事の解釈を変化させていくことであると示唆している。研究参加者にとっても、困難に陥った経験は苦しいものであった。しかし、インタビューの中で自身の経験を語り、自身が困難を乗り越えた過程と結果までを振り返ることにより、研究参加者が困難だと感じた経験が、今につながる意味のある経験だったという認識に変化していた。ゆえに、管理者は、女性看護師が過去の経験を意味づけることを支援し、主体的なキャリア発達につなげることの必要性が示唆された。

以上より、育児経験を有する女性看護師の主体的なキャリア発達のためには、節目となるような時期には、女性看護師自身が状況を伝え支援を求めることが必要である。また、管理者は節目の時期に重点を置きタイムリーに支援を行うこと、困難を乗り越えた経験に対する意味づけを支援することが必要であると示唆された。

IV. 本研究の限界と今後の課題

本研究では、TEMを用いることによって、育児経験を有する女性看護師が困難を経験した際に、必要な看護師自身の力やその力を促進するための示唆

を得た。しかし、本研究は、困難を乗り越え看護師として働いている人に限定しており、様々な背景を持つ看護師のレジリエンスを描くことはできていない。また、TEMによって径路の類型を把握するためには7～11名程の人数が必要であるが、今回は6名の分析に留まった。今後は、多様な語りから、看護師のレジリエンスの様相における特有性や多様性を明らかにし、キャリア発達の中断を防ぎ主体的なキャリア発達の促進を検討していくことが課題である。

V. 結 論

育児経験を有する女性看護師の中堅の時期の困難に焦点を当てると、キャリア発達におけるレジリエンスの様相には、『ライフイベントによる困難を乗り越える局面』と『中堅看護師としての役割負担による困難を乗り越える局面』があり、ライフイベントによる困難と中堅看護師としての役割負担が重なることにより、何度も困難を経験しながらも、困難を乗り越え、仕事を継続しキャリア発達していく姿が浮かび上がった。

育児経験を有する女性看護師の主体的なキャリア発達を促すためには、自身の力を発揮しながらも、節目となるような困難には周囲からの支援を受けることが必要である。また、管理者は、節目にタイムリーな支援を行うことや、女性看護師が困難を乗り越えた経験についての意味づけを支援することの必要性が示唆された。

謝 辞

本研究にご協力いただきました研究参加者の皆様に、深く感謝申し上げます。

また、本研究はJSPS科研費18K10265の助成を受けて実施致しました。

付 記

本研究は、日本赤十字九州国際看護大学大学院看護学研究科共同看護学専攻（博士課程）に提出した博士論文の一部を加筆修正したものである。

本論文の一部は第42回日本看護科学学会学術集会において発表した。

利 益 相 反

本研究において、開示すべき利益相反は存在しない。

著 者 資 格

Y. Kは、研究の着想およびデザイン、データ収集、データ解釈、分析、原稿作成を行った。T. Hは、研究プロセス全体への助言、分析、原稿作成に貢献した。2名の著者で最終論文を読み、承認した。

文 献

- 新井麻紀子, 野崎由里子, 田中千鶴子, 徳本弘子 (2016). 中堅看護師が認識する自己の置かれている状況に関する国内文献の検討. 日本看護学会論文集看護教育, 46, 218–21.
- 荒川歩, 安田裕子, サトウタツヤ (2012). 複線径路・等至性モデルのTEM図の描き方の一例. 立命館人間科学研究, 25, 95–107. doi.org/10.34382/00004276
- Gysbers, N.C., Moore, E.J. (1975). Beyond Career Development-Life Career Development. *Personnel and Guidance Journal*, 53 (9), 647–652.
- 香川昭夫, 山本明弘 (2022). 精神科看護師におけるワーク・エンゲイジメントと自己効力感, レジリエンスおよび精神障害者にスティグマとの関連. 日本精神保健看護学会誌, 31 (1), 10–18. doi: 10.20719/japmhn.31.21-028 (参照 2023年5月18日)
- 柿田さおり, 大橋麗子, 魚住郁子, 高橋由起子, 竹下美恵子 (2023). 中堅看護師が考える所属部署の看護実践能力向上における課題とその解決方法. 日本看護学教育学会誌, 33 (1), 63–74. doi:10.51035/jane.33.1-2_63
- 小手川良江, 本田多美枝 (2019). 中堅看護師が職務継続の危機を乗り越えるプロセス. 日本赤十字看護学会誌, 19 (1), 37–48. doi:10.24754/jjrcsns.19.1_37
- 厚生労働省 (2023a). 看護師等の確保を促進するための措置に関する基本的な指針. <https://www.mhlw.go.jp/content/001160932.pdf> (参照 2024年9月21日)

- 厚生労働省(2023b). 令和4年衛生行政報告例(就業医療関係者)の概況. <https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/eisei/22/> (参照 2024年10月5日)
- 厚生労働省(2023c). 令和4(2022)年医療施設(動態)調査・病院報告の概況. <https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/iryosd/22/dl/02sisetu04.pdf> (参照 2024年10月4日)
- Masten, A. S., Best, K. M., Garmezy, N.(1990). Resilience and development : Contributions from the Study of Children Who Overcome Adversity. *Development and Psychopathology*, 2, 425-444.
- Mealer, M., Jones, J., Meek, P.(2017). Factors Affecting Resilience and Development of Post-traumatic Stress Disorder in Critical Care Nurses. *American Journal of Critical Care*, 26 (3), 184-192. doi: 10.4037/ajcc2017798.(accessed 2023-5-18)
- 中野沙織, 岩佐幸恵(2019). 中堅看護師の職業継続に関する文献検討-「離職」と「職業継続」の理由に焦点をあてて-. *The Journal of Nursing Investigation*, 16(1-2), 10-22. doi: 10.32273/jni.16.1-2_10 (参照 2023年5月18日)
- 根木香代子, 片山はるみ(2018). 女性中堅看護師のレジリエンスに対する自尊感情と自己効力感の影響. *日本看護科学会誌*, 38, 89-96. doi: 10.5630/jans.38.89 (参照 2023年5月18日)
- 日本看護協会(2022年11月21日). 2021年度ナースセンター登録データに基づく看護職の求職・求人・就職に関する分析報告書. https://www.nurse-center.net/nccs/scontents/sm01/SM010801_2_2021.html?20221121090000 (参照 2024年3月29日)
- 齊藤茂子(2018). 中堅看護師はなぜ離職するのか-最近5年間の統合的レビュー-. *東洋大学大学院紀要*, 54, 385-405. <https://toyo.repo.nii.ac.jp/records/10022> (参照 2024年5月27日)
- 植田満美子, 舟島なをみ, 中山登志子(2022). 潜在看護師の離職から復職に至る過程の解明-潜在看護師の経験の二次分析-, *千葉看護学会会誌*, 28 (1), 99-107. doi: 10.20776/S13448846-28-1-P99
- 魚住郁子, 水野郁子(2020). 老人保健施設の看護職がストレスを持ちながらもWell-beingに至るプロセス 意味づけの付与, レジリエンスに焦点を当てて. *日本看護医療学会雑誌*, 22 (1), 1-12. doi: <https://doi.org/10.11477/mf.7009200310> (参照 2023年5月18日)
- 安田裕子, サトウタツヤ(2017). TEMでひろがる社会実装: ライフの充実を支援する. 東京: 誠信書房.
- 安田裕子, サトウタツヤ(2022). TEAによる対人援助プロセスと分岐の記述: 保育, 看護, 臨床・障害分野の実践的研究. 東京: 誠信書房.

Abstract

Key Aspects of Resilience in the Career Development of Female Nurses with Childcare Experience

– Focusing on Mid-career Difficulties –

Yoshie Kotegawa Tamie Honda

〔Objective〕 To clarify the aspects of resilience in career development through the process of overcoming difficulties experienced by female nurses with childcare experience during their mid-career.

〔Method〕 Semi-structured interviews were conducted with six female nurses who had between 15 and 20 years of childcare experience. The results were analyzed using Trajectory Equifinality Modeling (TEM). The influencing factors, which were based on the female nurses' difficult experiences and overcoming them, were expressed in a TEM diagram.

〔Results〕 This study focused on the difficulties faced by female nurses with childcare experience during their mid-career. The aspects of resilience in career development include “overcoming difficulties due to life events” and “overcoming difficulties due to the burden of the role as a mid-career nurse.” This involves a series of processes in which female nurses used their own strengths and the support of those around them to overcome difficulties, which led to personal growth.

〔Conclusions〕 To support female nurses in demonstrating their abilities, it is necessary to provide timely support that identifies turning points and gives meaning to the experiences of overcoming difficulties and their results.

Key words : Resilience, Female nurses, Career development, Trajectory Equifinality Modeling (TEM), Childcare experience

Address reprint requests to :

Yoshie Kotegawa. Japanese Red Cross Kyushu International College of Nursing

1-1 Asty Munakata-city, Fukuoka, 811-4157, JAPAN

Phone : 0940 - 35 - 7001 / E-mail : y-kotegawa@jrckicn.ac.jp